



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』とヨハネ福音書研究
Author(s)	佐々木, 啓
Citation	北大宗教学年報, 1, 36-46
Issue Date	2018-08-31
DOI	https://doi.org/10.14943/85642
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71509
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_5_sasaki.pdf



【報告】

オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』とヨハネ福音書研究＊

佐々木 啓

新約聖書のヨハネ福音書のプロローグ（1章1～18節）には、いくつもの本文批評（textual criticism）上の問題がある。その中でも、20世紀の後半に学会を賑わせたのは、1章3節から4節にかけての、句読法上の異読をめぐる議論である。

具体的には、（1章3節）…ὁ γέγονεν.（4節）ἐν αὐτῷ ζῶν ἦν と3節の最後にピリオドを置くか、.ὁ γέγονεν ἐν αὐτῷ ζῶν ἦν と、その前のὁ γέγονεν という節の前にピリオドを置くかという判断に関するものである。新約研究上の基本テキストである、いわゆるネストレ＝アラント版が、第25版までは、前者の読みだったのに対して、1979年の26版以降では後者の読みへと転換したことで話題になったものである。

部外者にとっては、あまりに細かすぎて、直ちにピンとこないような問題であるかもしれないが、後で述べるように、釈義とからんでも、いろいろと議論されるべき異読なのである。ここでは、そういった釈義上の問題そのものには立ち入らないが¹、日本語への翻訳上の違いだけを示すなら次のようになる。

…ὁ γέγονεν. ἐν αὐτῷ ζῶν ἦν と3節と4節の切れ目にピリオドをうって、現行の節の切れ目を文の切れ目とした場合は、ὁ γέγονεν が、それより前の3節の文 καὶ χωρὶς αὐτοῦ ἐγένετο οὐδὲ ἕν の主語 οὐδὲ ἕν にかかる関係節となり、新共同訳聖書のように、「成ったもので、^{ことば}言によらずに成ったものは何一つなかった」といった訳が可能になる。

それに対して、.ὁ γέγονεν ἐν αὐτῷ ζῶν ἦν とὁ γέγονεν の前にピリオドをうつなら、この関係節を ἐν αὐτῷ と繋げることになり、岩波（小林）訳²のように「彼（ロゴス）において生じたことは、命であり、…」(あるいは、この関係節を ἐν αὐτῷ の αὐτῷ が受けて「生じたもの（それ）において、（ロゴスは）命であった」³) といった訳が可能になる。

新約聖書全文書について個人で翻訳と注釈を完成させるという偉業を成し遂げた田川建三が最近出版した『ヨハネ福音書 訳と註』⁴においても、この箇所の異読をめぐるかなりの語数を費やして論じられている。結論からいうと、田川もネストレ＝アラント版26版以降（並びに岩波＝小林訳）と同じく、.ὁ γέγονεν ἐν αὐτῷ ζῶν ἦν と、文の切

れ目を $\delta \gamma \epsilon \gamma \omicron \nu \epsilon \nu$ の前に置く読みを採用しているのだが、そのさい、いつものように田川独特の調子で、この異読をめぐる既存の議論が次のように批判されている。

「ただしエルサレム聖書は註で、四世紀までは、我々のように文を区切って読む読み方が写本上はつきり確認できる (solidement attesté)、などと書いているが(岩波訳はその註を下手に写している。他人の註を右から左に借りてくる前に、まず自分の眼で事実を確かめなさいな)、まさかね。その時代の写本は単語の分かち書きはせず、文を切らずにずらずらと書いていたのだから、どこで文を切るつもりだったかは、普通はわからない。例えば、p⁶⁶ はここは切れ目なしにずらずら書いている。他方 κ (四世紀だぞ)はところどころ気の向いたところに文の区切りを示す小さな黒点を入れているが、ここは後世の節の区切りと同じ位置に入れている (ただしこの黒点は第三修正者が入れたものだと言われている。つまりずっと後世の加筆) 等々。ここは古代の写本の存在もしない区切りを根拠にしたりするのでなく、文そのものの自然な流れとして我々のように訳すべきものである」⁵ (傍点は佐々木による)。

この記述で、田川の言い様は間違いではないとしても、もう少し丁寧に論じる必要があるように思われる。なぜなら、岩波訳はともかくとして、エルサレム聖書の判断は、以下で述べるオリゲネス (ca. 185 - ca. 254) などの教父の聖書引用を根拠にした判断であるとも考えられるからである⁶。

つまり、オリゲネスは、ギリシャ語で残っている彼の『ヨハネ福音書注解』⁷において、ヨハネの当該章句を何度も引用しており、その際の読みは、いずれも “ $\delta \gamma \epsilon \gamma \omicron \nu \epsilon \nu \acute{\epsilon} \nu \alpha \acute{\upsilon} \tau \tilde{\omega} \zeta \omega \eta \tilde{\eta} \nu$ ” としか読めないのである。これは、オリゲネスが引用しているこの箇所のヨハネ福音書のテキストが、上述の議論でいうと、ピリオドを $\delta \gamma \epsilon \gamma \omicron \nu \epsilon \nu$ の前に置き $\acute{\epsilon} \nu \alpha \acute{\upsilon} \tau \tilde{\omega}$ と繋げて読むネストレ＝アラント 27 版以降のよみ、日本語では、岩波訳（そして田川訳）の読み方である、ということである。

したがって、エルサレム聖書の「はつきり確認できる (solidement attesté)」という表現は、田川が批判しているようなことではなく、今述べたようなオリゲネスの読み方などによる判断であるかと思われる⁸。パピルスなどに関しては、確かに田川が書いている通りであろうが、こういったオリゲネスの引用などを勘案するならば、岩波（小林）訳の注釈もあながち誤りというわけでもない⁹。

ここまでの議論は、新約本文批評上の細かい議論であるが、議論の大枠や重要性は理解で

きと思われる。まず、新約本文の確定には写本だけでなく、教父などによる引用が重要だということである。これは何を今更なのであって、新約本文批評においてはその重要性は夙に指摘されてきたことであり、それなりの研究もなされてきた¹⁰。そして、コンピュータの登場によって、さらに膨大なテキストの網羅的な研究も容易になった。

ヨハネ福音書ギリシャ語テキストとオリゲネスのテキストの関係については、1992年に出版された、Bart Ehrman らの *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen*¹¹ が、その種の研究として代表的なものである。先程来論じてきた $\delta \gamma \epsilon \gamma \omicron \nu \epsilon \nu \acute{\epsilon} \nu \alpha \upsilon \tau \omega \zeta \omega \eta \tilde{\eta} \nu$ と続けて読むオリゲネスの読みについても、本書のおかげで、その引用が、かなり分量のあるオリゲネスの『ヨハネ福音書注解』のギリシャ語原典において、合計、逐語的な引用としては6～7回、暗示的なものを含めるとそれ以上、あることが容易に確認できる¹²。

それならば、田川が言うように句読点が曖昧なパピルスなどよりも執筆年代が古いと考えられる（通説によれば231年以前に執筆が始められた）¹³オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』の引用の読み方で決まり、と言えるのではないか。

あるいは、オリゲネスはいわゆる「アレクサンドリア型」本文に該当するとされているのだから¹⁴、p^{66, 75} や κ などの代表的なアレクサンドリア型の読みが、この点で曖昧だとしても、むしろオリゲネスに即して、これらの読みも、 $\delta \gamma \epsilon \gamma \omicron \nu \epsilon \nu \acute{\epsilon} \nu \alpha \upsilon \tau \omega \zeta \omega \eta \tilde{\eta} \nu$ とピリオドを前に置く読みなのだ、と判断すべきではないのか？

しかし、ことはそれほど単純ではない。なぜなら、Ehrman らが前述の本の序文で述べているように、オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』自体のギリシャ語原典の執筆や伝承過程が問題となるからである。それは、オリゲネスの注解が口述筆記であることなどとも関係するが、そもそもオリゲネスのギリシャ語原典自体の長い伝承過程において、むしろ、成立した後の新約聖書に、オリゲネスのテキストに引用されている新約聖書の文言を、調和させるような試みがなされはしなかったか、といった疑問も残る¹⁵。ここでもわれわれはまた、伝承の渦の中に巻き込まれることになる。

そしてすでに、オリゲネス自身がそういった福音書テキストの伝承問題にかかわっていることが、彼の『ヨハネ福音書注解』の中にも見てとれる。

$\acute{\alpha} \nu \tau \iota \gamma \rho \alpha \phi \omicron \nu$ というのが、今日の本文批評でいうところの「写本」を表わすギリシャ語であるが、本稿で取り上げた1章4節について、オリゲネスは、この箇所の $\acute{\alpha} \nu \tau \iota \gamma \rho \alpha \phi \omicron \nu$ について興味深い言及をしている。

オリゲネスは『ヨハネ福音書注解』第2巻、(13)、132で次のように述べている。

τὶνὰ μὲν τοὶ γε τῶν ἀντιγράφων ἔχει, καὶ τάχα οὐκ
ἀπιθάνως· ὁ γέγονεν ἐν αὐτῷ ζῶν ἔστιν.

「しかしながら、おそらく信頼できないわけではないが（むしろかなり納得できるものであるが）、『彼・それ（ロゴス）において生じたものは生命である（『であった』と過去形でない）』という写本がある」¹⁶

ここには、現代の本文批評の観点からしても問題がある。つまり、なぜ、先ほど言及したように、アレクサンドリア型であるはずのオリゲネスがアレクサンドリア型の読み（たとえばκ）¹⁷を他の「写本」、要するに「異読」としているのか、といったことである¹⁸。

ただし、本稿の目的は、こういった細かい議論に批判や意見を提出することではない。私自身の関心はもっと大きな、新約聖書の成立過程といった問題、あるいは、そもそも新約聖書学という学問そのものの問題性にある。

私が問いたいのは、いまわれわれの手もとにあるようなヨハネ福音書は、いったいいつそのような姿になったのか、あるいは、別の言い方をすれば、どのような段階でヨハネ福音書がヨハネ福音書になったと言えるのか、ということである。そのような問いは、従来の「歴史的＝批判的」といわれる聖書研究においても問われてきたのではないかと、言われそうだが、私の問題意識は、それとは少し異なると考えている。

その問題意識とは、従来の「歴史的＝批判的」と呼ばれる聖書研究は、ドイツ流のものであれ合衆国流のものであれ、いわばプロテスタント的、聖書正典中心主義的イデオロギーが強く、知らず知らずのうちに、現にある聖書正典、この場合はわれわれの手もとにある「ヨハネ福音書」を前提として議論を展開してしまっているのではないかと、という疑念である。逆に、フランスなどのカトリック圏では、やはりそのイデオロギー的傾向によって、よかれあしかれ、教父らによる「伝承」をもまた重視するのである。それゆえカトリックの研究者の業績であるエルサレム聖書では、前述のような記述になっているのではないかと？

また、別の例をあげれば、カトリックの聖書学者である M.-É. Boismard と A. Lamouille の *Un Évangile pré-johannique*¹⁹では、オリゲネスより若干後の時代の教父であるヨハネス・クリュソストモス（344/349 - 407）の説教（homélie）のテキストを分析して、彼の扱っている「前ヨハネ（pré-johannique）福音書」には、「初めに ^{ことば}言があった」で有名な、いわゆる「プロローグ」（1:1-5, 9-18）が欠けていると分析している²⁰。

以上述べてきたような、研究者というか、いずれにせよ読み手の側の傾向といった問題は、

究極的には、今日のわれわれ自身がつイデオロギー的背景如何、という解釈学的に根本的な問いに突き当たるだろう²¹。

いったい、われわれが今日読むような新約聖書のテキストはいつ成立したのか、という問いは、実はますます錯綜した領域に踏み込まざるをえない、と言えるだろう。例えば、ごくわずかなパピルス断片が存在することによって、今日あるようなヨハネ福音書テキスト全体がすでに成立していたなどと考えるのは、早計なのではないだろうか²²。

＊ 本稿は、2017 年 9 月 16 日に東京大学で開催された日本宗教学会第 76 回学術大会において行なった口頭発表の原稿に、加筆修正したものである。同趣旨のレジュメが日本宗教学会編『宗教研究』第 91 巻別冊、216 頁に掲載されている。

聖書

Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece*, Stuttgart, Deutsche Bibelgesellschaft, 2012.
オリゲネスのテキスト

Origène, *Commentaire sur S. Jean*, Tome 1 (Texte grec, avant-propos, traduction et notes par Cécile Blanc), Paris, CERF, 1966 (Sources chrétiennes, N° 120).

Origenes, *Johanneskommentar Buch I-V* (Herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Hans Georg Thümmel), Tübingen, Mohr Siebeck, 2011.

¹ この箇所に関する釈義的な問題については、たとえば、田川建三訳著『新約聖書 訳と註 5 ヨハネ福音書』（以下『ヨハネ福音書』）作品社、2013 年、90 頁参照。当該箇所と釈義上の問題との関連についての簡潔な解説は、Bruce M. Metzger, *A Textual Commentary of the Greek New Testament* (Stuttgart, Deutsche Bibelgesellschaft, 1994²), p. 167f. を参照。

² 小林稔訳「ヨハネによる福音書」『ヨハネ文書』（新約聖書Ⅲ）岩波書店、1995 年、3 頁。

³ たとえば、Bultmann の読み方であり、釈義上の問題と密接に絡めて論じられている（Rudolf

Bultmann, *Das Evangelium des Johannes* [Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1978 (1941)], S. 22f.)。

⁴ 田川『ヨハネ福音書』。

⁵ 田川『ヨハネ福音書』90頁。田川自身の日本語訳は、「それにおいて生じたものは、生命であった」であり、『『ロゴスにおいて生じたものは、生命として生きた』と言っているだけのことであり」（同頁）としている。

⁶ 「彼（オリゲネス）は、ギリシャ語で新約聖書を広範に引用した最初の著作家であり、しかも、テキストの言葉そのものに極力注意を払いながらそれを行なった」のである（Bart D. Ehrman, Gordon D. Fee, and Michael W. Holmes, *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen* [Atlanta, Scholars Press, 1992], p. 11）。さらに、エイレナイオス（ca. 130 - 202）などもこの読み方のようなのである（『異端反駁』I. 8. 5）。

⁷ オリゲネス『ヨハネ福音書注解』の残存するギリシャ語原典テキストは、全32巻中、第1、2、6（結末が欠落）、10（冒頭が欠落）、13、19、20、28、32巻である。

⁸ ただし、エルサレム聖書の注釈の記述を、私自身は「事実を自分の眼で確かめ」られていない。田川が書いているような注釈を手もとのエルサレム聖書に見出せない。おそらく、分冊段階のエルサレム聖書の「ヨハネ福音書」への注釈ではないかと思われるが、未確認。

⁹ 田川が言及している「エルサレム聖書」の「註」の箇所を、残念ながら私は確認できないものの、その「エルサレム聖書」の発行もとである l'École biblique de Jérusalem の代表的研究者 M. -E. Boismard や A. Lamouille による *L'Évangile de Jean* (Synopse des quatre Évangiles en Français) (Les Éditions du Cerf, 1977), p. 71 には、以下のような記述がある。

「古代の写本にはコンマやピリオドが打たれていないので、〔写本を校合するという〕厳密な意味での本文批判とはならないが、3節と4節の間の区切り方の問題をまず検討しなければならない。一つの区切り方（Aとする）は、『生じたもの（ho gegonen [= ὁ γέγονεν]）』の前にピリオドをおく。そうすると、翻訳は次のようになる：『すべてのものは彼（ロゴス）によって生じた。そして彼なしにはなにものも生じなかった。彼のうちに生じたものは命であった…。』もう一つの区切り方（Bとする）は、『生じたもの（ho gegonen）』の後にピリオドをおく。翻訳は次のようになる：『すべてのものは彼によって生じた。そして、生じたもの（の）なかのなにものも彼なしには生じなかった。彼のうちには命（ギリシャ語では冠詞なし）があった…。』決め手となる議論は、Aの区切り方を優位に立たせる（K. Aland）。〔写本による〕外証の観点からは、次のようなことが言える。3節と4節の間に句読点を打っているもっとも古いギリシャ語写本は、Aの区切り方である（C〔エフライム写本；AD 5〕 D〔ベザ写本；AD 5/6〕 L〔レギウス写本AD 8〕）。Bの区切り方は、6～7世紀の写本からしか見られない。もっとも古い翻訳写本は、〔古いギリシャ語写本と〕同様に、Aの区切り方である（古ラテン語写本〔AD 4～〕 シリ

ア語クレトニア写本〔AD 5 [2/3] コプト語サヒド方言〔AD 3~〕〕。2世紀のグノーシス主義の著述者たちはみな、Aの区切り方である。教父たちでは、Bの区切り方は4世紀以降にしかあらわれない；このBの区切り方は、マケドニオス派やアリウス派〔いずれも、4世紀以降〕との論争において生じたもので、二次的な性格をもつことは明らかである。したがって、上述の確かな知見によって、Aの区切り方だけが4世紀の中頃まで知られていた唯一の読みである、と言うことができる〕（〔 〕内は佐々木による補い、部は、同じく佐々木による強調）。

ところで、岩波（小林）の注釈は以下の通りである。

「つまり『彼において起こったことは命であった』。ただし、『生じたものは彼のうちにあって命であった』とも読める。また文法的には『生じたもののうちにあってことばは命であった』も可〔これらは上記引用におけるAの区切り方による翻訳〕。新共同訳の『成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言のうちに命があった』〔上記引用におけるBの区切り方〕は四世期末以降の伝統的な読み方に従ったもの。ここでは定本〔Nestle-Aland 27版〕に従い、それ以前の句点〔同Aの区切り方〕を採る」（〔 〕内は佐々木による補い、部は、同じく佐々木による強調）。

つまり、多少ややこしいが、岩波（小林）訳における当該箇所の注の波線部は、M. -E. Boismard らによる *L'Évangile de Jean* の波線部に触れられているような「事実」を踏まえた記述であると考えられる。田川は「写本」のことを縷々述べているが、そもそも岩波（小林）の注は、「写本」について論じていない。さらに、田川は、「エルサレム聖書は註で、四世紀までは、我々のように文を区切って読む読み方が写本上ははっきり確認できる(solidement attesté)、などと書いている」と記しているが、このエルサレム聖書の当該の注を、私はなぜか見つけ出せない。また、上述のことからしても、「岩波訳はその註を下手に写して」、「他人の註を右から左に借りて」きているとは思えない。「まず自分の眼で事実を確かめ」ようとする、むしろ「事実」はこのようになるのだが、いずれにしても、田川の批判は多少性急な観を否めない。

「定本」と岩波（小林）の読みは、「古代の写本の存在もしない区切りを根拠にしたりするのではなく」、むしろ、教父たちなどに存在している区切り方—これもまた「写本」によるわけだが—を根拠に決定されているのである。

ちなみに、田川が自らの読み（結局のところ、「定本」、及びそれによる岩波=小林の読みとも同じ読み）の根拠としている「文そのものの自然な流れ」について、Boismard et A. Lamouille, *L'Évangile de Jean* では、以下のように分かりやすく説明されている。長くなるが、参考までに私訳を附す（本稿の注5も参照）。

「—〔テキストの分析による〕内証によるなら、Aの区切り方が正しいとする主な議論は、『命』という語の前に冠詞がないことである（^マ ^マ（1））。『生じたもの（ho gegonen）』という表現を除く

と、『…彼のなかにあったのは命〔冠詞なし〕であった〔彼のなかには「命」があった〕、そして、命〔冠詞あり〕は人々の光であった』となる。もし、『生じたもの (ho gegonen)』という表現を3節に結びつけようとする（Bの区切り方）、4節の最初の節の『命』は必然的に主語となり、4節の次の節の『命』という語には冠詞があるのに、〔前者の〕同じ語に冠詞がないという〔テクストの〕事実が説明できなくなる。逆に、Aの区切り方をとるなら、『生じたもの(ho gegonen)』という表現が主語となり、『命』は述語である〔から、冠詞がないのは説明がつく〕；あるいは、ヨハネ福音書では、この箇所のように、述語にあたる実詞は、『…である/がある』という動詞の前に置かれ、確定されているものでも定冠詞をとらない。したがって、Aの区切り方だけが、4節の最初の節の『命』に冠詞が附されていないことを正当に説明できるのである。－同様に、Aの区切り方だけが、3節冒頭からの対照法的な対句による並行表現を維持している。ギリシャ語を文字通りに翻訳すると次のようになる：『すべてのものが彼によって生じた。そして彼なしにはなにものも生じなかった』。この二つの節は、『彼によって〔δὲ αὐτοῦ〕 /彼なしに〔χωρὶς αὐτοῦ〕』と『すべて〔πάντα〕 /何一つ…ない〔οὐδὲ ἓν〕』という二つの対立によって構成されている。この後者の対立は、この〔『すべて〔πάντα〕 /何もない〔οὐδὲ ἓν〕』という〕二つの語句が最初と最後におかれていることによって、いっそう際立っている；もし、『何一つ生じなかった〔οὐδὲ ἓν〕』に相当するギリシャ語のあとに〔Bの区切り方のように〕『生じたもの (ho gegonen [= ὃ γέγονεν])』という表現を付け加えるなら、上記のような二つの対立表現はかなり弱められてしまうだろう。－さらに、Aの区切り方だけが、1節から4-5節までのように、それぞれの節の最初の語がそれに先立つ節の最後の語を再びとりあげる、という鎖状の節の連鎖を守っているの；〔Bの区切り方のように〕『生じたもの (ho gegonen)』という語句を3節の最後につけるなら、同じ動詞を〔一つの節のなかで〕2回用いていることになるが、〔Aの区切り方のように〕4節の最初に結びつけるなら、3節の終わりと4節の冒頭は〔『生じる』という意味の〕ginesthai〔γίνεσθαι〕（『何一つ生じなかった〔ὃ γέγονεν οὐδὲ ἓν〕－生じたもの〔ὃ γέγονεν〕』という動詞によって〔上記のような鎖状に〕結びつけられる。－最後に、クムラン〔死海写本〕のテクストは、Aの区切り方を支持する。そこでは、神がすべてを創造したという考えが、（ヨハネ福音書1章3節のように）肯定的な形式と否定的な形式で表現されているが、否定的な表現は、ただ一つの動詞を用いることによって表現されている〔からである〕。そのテクストを文字通り引用すると次のようになる：『そして神の知恵によってすべてが存在し、そしてすべてのものを神は彼の思惟によって強固にし、そして彼なしにはなにものも生じなかった』（1QS〔宗規要覧〕11:11; cf. 11:17-18; 1QH〔感謝の詩篇〕5:1-2）。

というわけで、ヨハネ福音書テクストの〔神学思想上の〕解釈にとっては厄介であるが、われわれはAの区切り方を採用するのである」。

¹⁰ Bruce M. Metzger, *The Text of the New Testament, Its Transmission, Corruption, and Restoration* (Oxford University Press, 1969), pp. 86-92. 橋本滋男訳『新約聖書の本文研究』聖文舎、99～105頁。当の田川建三自身も、「もしも彼らがその〔聖書の〕引用を逐語的に正確になしていると仮定すれば、その引用箇所については、聖書の写本そのものと同等の、場合によってはそれ以上の、価値があることになる。教父の多くは、もちろん、主な大文字写本よりも前の時代に著作していたのであるから」（田川建三『書物としての新約聖書』勁草書房、1997年、381頁。〔 〕内は佐々木による補い）、あるいは、「こちら〔教父たち〕の正文批判もかなり微妙なものがあるが、それらの問題に十分に注意をはらえば、教父の証言は非常に貴重な資料である」（同、382頁）など書いている。前注9も参照。本稿における議論においては、オリゲネスのテキストの「正文批判」についても十分配慮したつもりである。

¹¹ 注6で言及した Bart D. Ehrman et. al., *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen*.

¹² *ibid.*, pp. 45f. 具体的なそれらの箇所は、オリゲネス『ヨハネ福音書注解』第1巻、(19)、112；(32)、223、第2巻、(16)、112；(16)、114；(18)、128；(21)、137；(24)、155などである。ちなみに、オリゲネスによるこの箇所のパラフレーズ的な引用の仕方によれば、「ロゴスのうちに生じたものは命であった」と読んでいるらしいことが推測できる。『ヨハネ福音書注解』第2巻、(24)、155では、次のようにパラフレーズされているからである；«ὁ γέ γοῦνε, γὰρ φησιν, ἐν αὐτῷ» — δηλονότι τῷ προειρημένῳ λόγῳ — «ζῶν ἢ ν». この読みがもたらす釈義上の問題については、たとえば、注1、3参照。

¹³ オリゲネス『ヨハネ福音書注解』の執筆年代については、小高毅訳『ヨハネによる福音注解』創文舎、1984年、による「解説」（同訳6～8頁）に詳しいが、いずれにせよ、当該の基本情報は、エウセビオス『教会史』第6巻による。

¹⁴ Metzger, *op. cit.*, p. 15*などを参照。

¹⁵ Ehrman, *op. cit.*, p. 17, n. 35などを参照。この問題は、それ自体でオリゲネス研究の重要なトピックであるだろう。

¹⁶ しかし、この箇所でオリゲネスが論じていることは、異読の是非そのものではない。オリゲネスにおける異読の問題については、Bruce M. Metzger, “Explicit References in the Works of Origen to Variant Readings in New Testament manuscripts,” in J. Neville Birdsall and Robert W. Thomson (eds.), *Biblical and Patristic Studies in Memory of Robert Pierce Casey* (Freiburg, New York: Herder, 1963), pp. 78-95などの研究があるが、未見である。オリゲネスの新約聖書引用の問題について扱った基本文献は、Ehrman et. Al., *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen*, p. 13, n. 30に詳しい。

¹⁷ 注7参照。

¹⁸ 田川は、ヨハネ福音書の本文批評上の問題について若干立ち入って論じており、「今後もっと丁寧な研究される必要がある」（田川『ヨハネ福音書』772~776 頁、特に 774 頁）とも記している。諸写本やパピルス間の錯綜した関係は田川が書いているが、Ehrman らは、田川が当然視している「カイサリア型」本文の存在すらも疑っているようである（Ehrman, et al., *op. cit.*, p. 29, n. 23）。Ehrman らが予告している前掲 *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen* の第 2 巻、オリゲネスによって復元できるヨハネ福音書テキストに関するさらに立ち入った本文批評上の分析が未だに出版されていないのは、この問題の複雑さを示しているのかもしれない。Ehrman, *The Text of the Fourth Gospel in the Writings of Origen*, pp. 10-15 など、さらに、B. D. Ehrman, “Heracleon, Origen, and the Text of the Fourth Gospel,” *Vigiliae Christianae* 47 (1993), pp. 105-118 も参照。

¹⁹ M. -É. Boismard et A. Lamouille, *Un Évangile pré-johannique*, Vol. 1: Jean 1.1-2.12, Tome 2 (Paris, Librairie Lecoffre, 1993), p. 209f.

²⁰ *Un Évangile pré-johannique*, p.209. もっとも、プロローグがある程度ヨハネ福音書本文から独立した存在であることは、従来の歴史的＝批判的研究の「文献批判（literary criticism）」の枠内でもさんざん議論されてきたことである。しかし、前ヨハネ（*pré-johannique*）福音書が実際に存在したとするならば、文献批判的に厳密な立場は、プロローグを省いて注解すべきではないか？たとえば、ブルトマンがヨハネ福音書 7:53-8:11、有名な「姦淫の女」の箇所について注解しなかったように。仮にヨハネ福音書「プロローグ」が（*pré*であれなんであれ）「本来」のヨハネ福音書にはなかったとするならば、ヨハネ福音書の他の箇所の解釈問題のみならず、キリスト教の歴史的・神学的理解そのものもかなり変わってしまうだろう。そうすべきではないという線引きはいったい何によるのだろうか？

²¹ そのような問題は、オリゲネスの『ヨハネ福音書注解』の和訳を含む各国語訳についてもみられるように思う。これについては、まだ十分なことは言えないが、たとえば、注 15 で触れた箇所のオリゲネスの翻訳についても、邦訳（小高訳『ヨハネによる福音書注解』131~132 頁）のようでは、微妙に論点がずれてしまうように思われるのだが、そういった問題については別の機会に譲らざるをえない。

²² 現在のところ新約文書すべてのパピルスの中でもっとも古いとされる（125 年頃とも言われる）p⁵²（Manchester University の John Rylands University Library にある Grenfell Papyrus 457）に関連して、新約聖書本文批評の世界的権威 B. Metzger のように、「もしこの小さな断片が前世紀〔19 世紀〕の中葉に知られていたなら、かのすぐれたテュービンゲン大学の教授、フェルディナンド・クリスチャン・バウル（Ferdinand Christian Baur）に影響を受けた新約聖書批評の学派が、第四福音書〔ヨハネ福音書〕の成立は一六〇年以降であると論じることもしなかったであ

ろう」などと、皮肉っぽく言い切ってしまうことは可能なのだろうか。このパピルスは、「大きさは六・五センチに七センチほどであり、内容も第四福音書の数節を含むのみ（一八・三一 - 三三、三七 - 三八）」に過ぎないからである（Metzger, *The Text of the New Testament*, pp. 38-39. 橋本訳『新約聖書の本文研究』、38～39頁）。